

令和6年度第1回こどもはぐみ推進本部会議録（要旨）

開催日時	令和6年4月12日（金）16:15～17:30
場所	真庭市役所 本庁舎 応接室
出席者	本部長（太田市長）、副本部長（伊藤副市長）、三ツ教育長、 危機管理監（代理 岩野）、総合政策部長（木村）、政策推進監（牧）、 総務部長（金谷）、生活環境部長（代理 矢田部）、健康福祉部長（樋口）、 産業観光部長（木林）、建設部長（美甘）、まちづくり推進監（川端）、 会計管理者（今石）、教育次長（武村）、消防長（代理 森木）、 湯原温泉病院事務部長（西本）、議会事務局長（児玉）、 蒜山振興局長（南）、北房振興局長（行安）、落合振興局長（大塚）、 勝山振興局長（三浦）、美甘振興局長（安藤）、湯原振興局長（河島）
事務局等	子育て支援課（広岡、吉原、神庭、二宗、水島）
傍聴者	2名
議事内容	<p>① こどもはぐみ応援プロジェクト2023の報告 資料1 資料2</p> <p>② こどもはぐみ応援プロジェクト2024 こども・子育て関連重点施策 資料3 資料4 資料5</p> <p>③ 「こどもの居場所から見えるもの」ユースセンターまあぶる代表 森年雅子氏より 資料6</p> <p>④ 充実を図っていくための意見交換</p>
冒頭の事項	<p>本部長（太田市長）：</p> <p>これまで「こどもまんなか」ということで取り組みを進めてきた。国の方も子ども家庭庁にて様々な取り組みを行い、真庭市でも子ども家庭センターを作り、本格的な対応を始めたところである。今日は今年度第1回目ということで、メンバーも新しくなっている。皆さん共通認識をして、組織を上げて市民とともに取り組んでいくということの出発という位置づけで、今日の会議をしたい。遠慮なく、意見を出してほしい。</p>
①こどもはぐみ応援プロジェクト2023の報告 資料1 資料2	<p>こどもはぐみ担当課長</p> <p>昨年度からこどもはぐみ応援プロジェクトをしており、「相談支援」や「出産育児生活支援」、「経済的支援」、「子育て環境整備」の四つの分野で、子どもの権利や幸せを守り、子どもの健やかな成長や自立を支援するために事業を進めている。</p> <p>2023年は次の五つの柱を基にプロジェクトの方を進めた。</p> <p>①地域全体で支える仕組みづくりについて</p> <p>8/10に「こどもまんなか応援サポーター宣言」をし、「子育て応援駐車場の整備」であるとか、「まにわくんにベビーカーを固定するベルトの設置」、「子ども連れのかたへの窓口対応」、「おむつを捨てられる公共施設を増やす」というような取り組みを実施。</p> <p>2/12に「こどもまんなかまつり」というイベントを開催し、多くの方にご参加いただき、子どもたちも大変喜んでいただいた。</p> <p>3/8は「こどもまんなかユース座談会」を開催し、高校生15名、大学生5名の方に参加いただき、自分たちで地域の大人とつながって、どういった活動ができるかというような意見を出し合った。今後、その中から出た意見から一つでも活動ができるよう、子どもたち</p>

が考えていくというようなこともしていきたい。

職場環境を考えていかなければならないということで 3/15 に「企業関係者座談会」を開催。市内の企業の方にもご出席いただき、企業の取り組みや抱える課題等について意見交換をした。積極的に子育て支援に取り組んでいる企業もあり、有意義な意見交換ができた。また、産業政策課が令和 5 年度に実施した、子育て世帯に対するアンケート調査の結果も説明し、市内の子育て世帯の可処分所得のデータ等もこの中で説明をした。

②情報発信については、本年度 LINE 連携を図って情報発信をするようなシステム改修や、市内の子育て世帯の方にインフルエンサーとして口コミをしていただくような事業を予算化している。真庭市のホームページには子育て情報を集めた「こども ICT ネット」があり、体系化が必要になっているので、今年度はもう少し見やすいようなホームページにできるように改修予定。

③こどもはぐみ応援プロジェクトの推進について、各課で進めていただき、実績の方を本部会議で意見交換している。

④市役所全体の体制強化について。こどもはぐみ推進本部会議の会議資料や会議録はホームページで公開している。課長が出席するマトリックス会議について、昨年は計 4 回開催。今年度も、政策検討等をこのマトリックス会議の方で進めていきたい。

⑤保育士の確保について、昨年度、美作大学と包括連携協定を結び、「こどもまんなかまつり」では学生の方でんでん太鼓を作るようなワークショップを開いてもらったところ、子どもたちにとっても人気で、大勢の子どもがワークショップに参加した。大学等へのリクルート活動をするために、保育園の様子やすでに働いている方からの声を掲載した新リーフレットを作成し、今年度のリクルート活動に活用したい。

また、資格を取得して 5 年以内に真庭市内の保育施設に就職した方については 25 万円、真庭市に自分の住居としてアパートを借りた方については、プラス 25 万円まで最大で 50 万円を給付する「真庭市で働く保育士新生活支援事業」を今年度から始めている。すでに市内の保育園等に、申請の周知をしている。

本部長（太田市長）：

保育士確保や待機児童の現状はどうか。

健康福祉部長：

4 月 1 日時点での待機児童、国の基準という待機児童については 0。昨年は 2 名ほどいたが今年度については 4/1 時点では 0 である。年度途中の入園は今後も調整をしていく。保育士の数については、今年度久世保育園が閉園したが、マンパワーはギリギリの中で回している。今回の支援制度も含めて、養成校にもリクルート活動を進めながら一定数確保していきたい。もう一つは、大学生も含めて、園の様子も知ってもらい、真庭市で働きたいということの意識の醸成をしながら、確保に務めていきたい。

本部長（太田市長）：

保育士が就職して合計で 50 万円等。相当額を出す思い切った対策を取ることにしたが、結果として、「ああ、こんな制度があったんだ」というのでは実際の効果ではない。学生の中に制度を知ってもらい、もちろんそれだけで真庭市の保育士になろうかという動機にはならないかもしれないが、事前に学生に周知し、こういう制度もあるので真庭市を選択しようかというものでないと、制度をつくった意義としてはない。そのあたりの取り組みはど

うか。

健康福祉部長：

昨年度から総務課とも一緒にリクルート活動ということで県内の養成校について回る段取りをしている。今回新設した制度も含めて、市として奨学金の返済の一部の補助する支援制度もあるということをパンフレットにまとめたものを作ったので、養成校に配布しながら、確保に動いていきたい。

本部長（太田市長）：

真庭市にすでに就職した先輩たちが、後輩の学生に、真庭市はここまで一生懸命やって、こんな制度があるよというのを口コミで言ってもらうのが相当効果があると思う。そのあたりの取り組みはどうか。

健康福祉部長：

養成校ばかりではなくて、実際に今園にいる保育士、先生方についても情報提供しながら、今後の確保に努めていきたい。また、大学に行く前の高校の段階でも当然情報提供していく必要があるので、その辺も含めて進めていきたい。

本部長（太田市長）：

口コミの効果は大きい。インターンシップの状況はどうか。

健康福祉部長：

通常、資格取得のカリキュラムとして現場実習はあるため、地元に戻って来られて実習を希望する方は多々ある。インターンシップというより大学等とも連携をし、実際に真庭の保育現場を見て体験してもらおうということを、通常のカリキュラムとは別でしていきたい。

副本部長（伊藤副市長）：

このプロジェクトは継続することが非常に重要なので、昨年度の取り組みを通じて把握した当事者方の意見をしっかりと踏まえて次につなげていくことで、今年度の取り組み内容がある。そうした視点でこの本部会議でも議論ができればよい。

保育士確保については、経済的な部分の対策を今回打ち出しているが、関係の皆さん方とやはり若い当事者の方とのご意見を聞くと、やはりその職場がどれだけ魅力があるかが選択肢の基準としてのウエイトが大きいと聞く。真庭市の保育現場が若い保育士にとって魅力あるものにしていく取り組みをしていかなければならない。保育を学ぶ学生と、真庭市のつながりを作る取り組みに力を入れていく。

②こどもはぐくみ応援プロジェクト 2024 こども・子育て関連重点施策について

資料 3

資料 4

資料 5

こどもはぐくみ担当課長：

今年度のプロジェクトをまとめた資料の冒頭に、子どもの権利と幸せを守り子どもの健全な成長や自立を支援するために、また、子どもの権利が一番に守られるように子どもの権利条約を掲載。

日本の子どもたちを取り巻く環境は日本版 DBS の問題もあるように多岐に課題がある。子どもは権利の主体であって、その尊厳が守られるべき存在。社会の変化を子どもたちが実感するためには、まず接する大人たちの態度が変わっていかなければならないという思いがあり、ここに子どもの権利を明記した。

今年度の政策的な予算はおよそ 14 億ほどで、前年度の約 1.43 倍の予算を確保した。このはぐくみ応援プロジェクトは、市民一人一人にわかりやすく伝えることが大変重要。政策の活用をしてもらえるように情報を届けることが何よりも大切。今年度は関係課と協力しながら情報発信を進めたい。全庁を上げて積極的な情報発信を進めてもらいた

い。

総合政策部長：

今年度拡充は「里山定住促進事業」、「里山留学事業」の2点を実施する。「里山定住促進事業」は各園に出張して、真庭の里山の大切や、地域への愛着を持つこと等の出前事業を15回に回数を増やして実施する。「里山留学事業」は、昨年度までは、1泊2日や2泊3日で、市外の子どもに里山の体験をしてもらう授業をした。今年度はさらに長期留学の受け入れを始める。岡山市内から1名の児童を中和の方に受け入れる。

健康福祉部長：

「子ども家庭センター」を設置し、児童福祉法の改定に伴う母子保健と児童福祉の部分を一体的にしていくことが一番大きなところ。

また、「母子手帳アプリサービス」を今年度導入予定。紙の母子手帳も残るが、国の動きも含めて利便性を上げるため、母子手帳アプリ導入する。

拡充部分の「妊婦・パートナー歯科検診」は生まれてくる子どもの健康を守るため妊婦とパートナーの歯科検診について自己負担の無料化する。

人材育成の部分では看護学生の奨学金制度を拡充。従来、真庭高校看護科に限定していたが看護養成校すべてを対象にして看護師の確保に努める。

こどもまんなかイベントやPR動画の情報発信等はさらに力を入れていく。

また、子どもの貧困対策等を包括する形で、子ども計画として今年度策定する。

さらに、真庭で働く保育士新生活支援事業で保育士確保に努める。

妊娠から出産子育てまでの期間を切れ目ない支援を、従来ある事業、新規・拡充の事業を随時検討する。

産業観光部長：

新規事業は「まにわの木ふれあい事業」。木のおもちゃを公共スペースに置くことで、子育て世代が木のおもちゃに触れる機会を増やして、真庭の未来を担う子どもたちの豊かな心の成長を助けることを目的に実施する。

もう一つ、新規事業は「子育て世代の就業環境改善事業」。令和5年度は市内の家庭や企業に実態調査を行った。今年度は全国の企業の子育てに関する優良事例を調査し、真庭に展開できるものがあれば市内の企業に啓発を行い子育て世代の環境を整備していく。

建設部長：

新規は「市営住宅リノベーション」。落合地区にある市営住宅内の一戸を、若者世帯向けにリノベーションをする。また、「市営住宅入居時の多子世帯の優遇制度」については前年度から継続する。

また、「空き家を活用する事業」は、3年以上市外に居住し、市内転入して3年以内の家庭に対して補助金を交付する。

教育委員会事務局次長：

新規事業は、「生理用品ナプキンスクール事業」。小中学校のトイレに生理用品を設置する。また、「学習交流センター整備事業」では、蒜山校地の前に、学習交流センターを建設する。次に、「よみたい、しりたい、こども応援事業」では公共の図書館の予約本の受け取りを学校でできる取り組みを始める。それから、自動車文庫の巡回を高校も含め

た巡回場所にする。最後に「こどもの居場所づくり支援事業」等、継続事業を引き続きやっていき、子どもが自由で自発的に遊ぶことができる遊びの機会を作っていくことと、それを見守る大人を増やしていくネットワークづくりを行う。

会計管理者：

基金運用で財源を確保して、事業のバックアップを考えている。関係部課長による公金の管理会議を早急に開催する。

本部長（太田市長）：

債券運用を含めて、財源を生み出していくことが大事。それぞれ情報交換しながら進めてほしい。何よりも制度を作って周知していくのが大事。市民周知の方はどうか。

こどもはぐくみ担当課長：

ホームページや SNS も活用するほか、地域でお話しする場ももちながら進めていきたい。

教育長：

子どもの権利条約について、人は、自分で育つ赤ちゃんを見れば思うが、育ちを応援するためには、やっていい安心感や自分で決める場や試行錯誤する場があるとか、それを見守る大人がいることが大事だと思う。サービスを提供して、それを享受する関係性も大事だが、子どもたちは一緒に活動する中で学ぶ育つことを大事にしたいと思う。これは子どもの課題だが同時に地域づくりの課題。変わるべきは大人だと思う。

ルールや禁止をして縛ると、子どもたちは活動の自由がなくなる。失敗させないように先回りをする、失敗から学ぶ権利が奪われる。そういうことをこの運動を通して、大人が考えて地域が考えていくことを大事にしたい。

本部長（太田市長）：

真庭版の子どもの権利条例を作るのが目的ではなく、教育長が話されたことを全体の共通認識にするようなことで、結果としてできればいいと思っている。その取り組みの進め方はどのように考えているか。

副本部長（伊藤副市長）：

子どもの権利を行政としてどう守っていくのか、市民を広く巻き込んでいくことが大事。地道にいろんな場で議論をしていくということからスタートしていく。

本部長（太田市長）：

真庭で子どもを育てるのが本当にいいという地域を作っていければ。特に失敗を社会全体が許容する心が弱くなってきている。勝山高校の入学式で、校長先生が「いっぱい失敗してください」と言っていた。包容力がなくてダメだと思う。むしろ大人の問題。

③ 「こどもの居場所から見えるもの」

資料 6

こどもはぐくみ担当課長：

今日は森年雅子さんにお越しいただいている。NPO 法人 manabo-de 代表で、昨年 9 月にユースセンターまぶるを立ち上げられ子どもたちの居場所づくりに励んでおられる。いろいろな活動の内容から課題と見えるものを今日お話しただけだと思うので、それをもとに意見交換ができたと思う。

NPO 法人 manabo-de 森年雅子氏：

元々高校教員で、13 年ほど高校現場にいた。13 年のうち 8 年間は真庭高校でお世話になり、保健体育の教員をしていた。真庭市はその赴任をきっかけに 9 年目に入ったところ。出身は岡山市だが真庭で骨を埋めるつもりで今住んでいる。この法人

manabo-de は、もともとは学校の先生たちで立ち上げた、有志団体になっており、みんなが学び合おう勉強し合うことをきっかけに、法人を立てたというような経緯がある。

manabo-de は三つの事業がある。

1 つ目の「mana スタ」はオンラインで先生方を中心に、勉強会を進めているもので、今も現役の先生方が中心になって進めてくれて月に一回、オンラインで勉強をする会になっている。海外の教育事情や心理的安全性とか非認知能力とか、今ホットなワードをテーマにして、全国の仲間たちと勉強をし合うというような会になっている。

2 番目はユースセンターまあぶるで、久世駅の近くに昨年 9 月にオープンし、10 代の居場所を運営している。

3 つ目が「うたて」という子育て支援とか、健康スポーツ事業に取り組む事業をしている。昨年度は地域団体と久世を拠点に活動している地域団体とコラボレーションして子育て支援を行った。今年はキッズからシニアまでが取り組めるようなゆるいスポーツ大会とか、自然体験、演劇ワークショップをしたい。生涯学習的な要素も含みながら、事業を展開していく。

今日はユースセンターまあぶるについて話をさせていただく。2023 年の 6 月頃から着手し久世駅の近くにある空き家を借りた。子どもたちがなにをしてもいい契約にしてもらい、家の中の内装や、壁の取り外しや、トイレの改修、床の張り替えなど子どもたちとしながら準備をした。未完成の状態をあえて残して、これから新しく来てくれる子どもたち、今いる子どもたちが自由に、自分たちの居場所を自分たちで作れることをコンセプトにしているので、できる限り大人はサポートしながら秘密基地を作る感覚で、子どもたちに、居場所を作ってもらっている。

オープンの際には、市長と教育長にも駆けつけていただき、想定以上の 90 名ほどの来場者があり、たくさんの人に応援していただけていると感じている。1 階スペースと 2 階スペースがあり、1 階は遊びのスペース、2 階は学びのスペースにして、中高生は割と 2 階の勉強スペースを使って自習をしたり、気を緩めたい時には 1 階でボードゲームをしたり卓球をしたりとか、自由に時間を自分たちで組み立てて過ごしている。

現在登録制をとっている。何かあった時のために、保護者の同意も得て、連絡先も管理をしている。現在登録してくれているのは 50 名ほどの子どもたちで、中には「小学 1、2 年生でもユースセンターに通ってはいけませんか」というような声もある。兄弟が通っている場合には来て良いということと、小学生は 17 時半までに帰ることを約束して遊びに来てもらう形になっている。中高生に関しては平日 20 時まで開けているので、その時間帯まで利用ができる形になっている。

勝山や月田、北房、落合からも来ている。新見など市外の子どもも通っている。

子どもたちが「やりたい」、「こんな夢を持っている」ことをスタッフが拾い上げて、実現させていくこともしている。探究学習も実施し、駄菓子大好きな中学生が自ら駄菓子屋の運営をしてみたいということで現在も挑戦をしている。この地区ではグレープ味が売れないという分析結果を出したり、今赤字を抱えているので、その赤字をどう返済していくかを考えさせたりとか、仕入れから、売上等お金の管理まで中学生にしている。僕も手伝いたいと言って、仲間になってくれた中学生もいる。

まあぶるキッチン市外の今年高校一年生になった子がユースセンターまあぶるを使って子ども食堂を自分たちでやってみたいと始めた。人に提供されるものではなく、自分たちで

作ってみたいと言い、自分たちで一緒に作って、大人から作り方を教えてもらって、自分たちで人を集めて、子どもたちに子ども食堂をやってみないかっていうことで、月に一回、一緒に作って一緒に食べる会をしている。

1月に能登地震があった時に、これをチャリティーイベントに変えたいということでチャリティーイベントに変えて、募金をすることも考えたり、実際に能登半島にお金を送って寄付17,000円をした。この二つが今年度新たにスタートしようとしているもの。

また、久世公民館でしていた、真庭学習会を中高生の居場所に近いところでやろうと場所を変えて6月から真庭学習会をスタートする。今まで週に1回金曜日のみだったが週2回に分けて、小学生にも選びしろがあるようにしたり、単に勉強を教えるだけではなく学ぶことはどうということなのかを、大学の先生方にも教えていただきながら、そういった機会も作っていく計画を立てている。狙いとしては真庭の子が真庭の子を教えて、真庭で先生になって帰ってくる循環ができればと思っている。

4つ目はこの春休み中に、大学を卒業して2〜3年ほど経った4名ほどが、仕事を辞めて真庭に帰ってきて相談をしにきた。社会が自分に合っていない、仕事があってなくてどうしようかという路頭に迷っているような状況。ハローワークに相談にも行くがハローワークに行くと、緊張して自分の思うことが喋れない。ユースセンターも若者支援はしていきたい。我々の団体のミッションとして掲げているのが「切れ目のない支援」のため伴走支援をしている。

また、「今真庭で頑張っている人たちって40代、50代の人多いよね？」というところから「20代、30代、何してるんだ」という点に危機感を持ってくれた若者たちが8名ほど集まりコアメンバーとして、若者でもっとも真庭を盛り上げていこうっていうような、ムーブメントも起きており、「ユースカウンセラー」をこれから始めていこうと動き始めている。具体的にはハロウィンイベント等その時期に合わせたイベント。クリスマス会やお餅つきは地域の方にも協力をいただいた。クリスマスでは、地域の方がピザ窯を持ってきてくださって、みんなでピザを焼いたり、お餅つきでは杵と臼や餅米を地域の方が持ってきてくださって、みんなでお餅つきをした。

子育て支援課と一緒に「こども真ん中ユース座談会」をした。真庭市出身の大学生のファシリテーターに協力をしていただき、高校生の真庭市に対する意識や、真庭市でやってみたいことのアイディアを出してもらった。出てきたのは「水族館を作りたい」という意見や、「ジビエなどで料理研究会をしたい」というようなもの。一方で、「睡眠の質を向上させたい」とかいうような内容も出てきているので高校生のリアルな声も拾えたと思う。

3/20には「まあぶるの春フェス」として中高生が出店したいものと地域が出店したいものを掛け合わせてユースセンターでイベントを開催した。

ほかに、津山市の通信制高校の子どもたちがユースセンターで卒業式をしたいと言ってきて、卒業式を実施した。

この4/7には「運動や体を動かしたい」高校生がいたので、その子たちが企画をして「ウエルビーイングフェア」として体を動かすイベントをしたりなど、月に一回ほどはユースセンターを軸にして、中高生がイベントを立てている。

サービスではない子どもの居場所を運営していて非常に強く感じているのが、「子どもは非常に忙しい」ということ。学校の目標に、「勉強もしっかり頑張っ、部活もしっかり頑張っ、ボランティアにも行って、地域貢献もしなさい」というような内容が書いてある。子ども

たちはいつ休んでいるのか。ユースセンターまあぶるに来ている子どもたちも、いわゆる隙間時間に利用している子どもが多く、「30分だけ居させてください」、「今日のリミットは15分間です」とか小学生もそういった状況になっている。

真庭は非常に広い地域なので、物理的な距離の問題もあり、ユースセンターまあぶるに行きたいが行くすべがないとか、行くのにお金がかかると不安を抱えている子どもの声も聞いた。子ども同士の交流はもちろん、大人と出会うことも重要。子どもがやりたいと思った種と一緒に育ててくれる関係性を作っていくには、こういったところの解消は非常に重要と思う。隙間時間に利用する子どもを紹介したが、ユースセンターは平日15時～20時まで開けていて、16時ぐらいに来る中学生が「この後塾があるんで20時まで居させてください」と言うが、16時から20時まで駄菓子を食べとりあえずしのぐような形になっていて、「家に帰ったらご飯食べてるのか」と尋ねると、「食わずに寝る」との返答だった。

食事の大切さもフォローをないといけない部分だが、家庭の方針もあるので、難しいところ。しかし、発達発育も成長期なので、しっかり食べさせてあげたいのも親心ではあるので、工夫をしていかなければいけない。

子どもの成長を見ていくと、居場所の維持のための広報活動は非常に重要。知っていただくことが必要。その上で話して関わり合ってもらおうというようなステップが踏めるように、広報活動は力をしっかり入れて行きたい。

特に、真庭市内の企業に知っていただきたい。子どもがやりたいと思うことに対して、一緒にワクワクできる大人が非常に少ない。

スタッフは常勤は3名。ボランティアのスタッフで大学生6名、社会人のボランティアが2名在籍してくれている。常勤の3名は、子育て世代で、夜の時間帯はついてあげられないとか、いろんな課題もある。そんな中で、多地域でユースセンターを運営されている地域は、地域おこし協力隊の方に入ってもらっていたりしている。いろんな運用の仕方があると思うが工夫も必要。

子どもたちの発言を拾うと、「今まで僕は誰々さんの息子、誰々君の弟としか見てもらえなかったのが、ここに来たら一人の人間として認めてもらえる」と発言した子どもがいた。私たちが手一杯になっている時に、視察の対応してくれた中学生もいます。そういった子どもたちだけでできることがたくさんありそれをいかにサポートしていくかが大人に必要なサポート。

④ 充実を図っていくための意見交換

健康福祉部長：

子どもは忙しいってということについて、実際その短い時間でもユースセンターまあぶるに来る子どもたちは生き生き過ごせてるのか。

森年氏：

生き生き過ごしていると思う。大人と話をしたいところがある。スマホやゲームをずっとしている子どもはいない。子どもは人と人との関わり合いとか、手を動かして自分で学びを得ることが、非常に楽しいんだと思う。短い時間であっても、積極的にやろうとしてくれるので30分でも15分でも来たくなるのは、我々にとってもありがたいし、子どもたちにとってもいいことと思う。

健康福祉部長：

子どもは勉強もやり部活もやり、地域活動もやり忙しい。子どもたちも色々な可能性が

広がり、大人からしてみれば良いということで目標が出されると思うが、子どもにはやりたいこともあるが、塾には行かないといけないということが制限なんだと思う。子どもだけで集まって何かするとか、遊ぶ場を提供ないといけないことも事実。中環であればえがお商店があるが、そういう場所が少しずつ広がればよい。

副本部長（伊藤副市長）：

子どもたちはユースセンターまあぶるの存在をどういう形で知るのか。

森年氏：

一番多いのは SNS とホームページ。高校生はホームページが多い。あとは口コミ。

副本部長（伊藤副市長）：

ユースセンターまあぶるの基本的な考え方は、何かを提供するのではなく、子どもたちの居場所、自分たちがやりたいことができる空間、それを提供することと思うが、子どもたちは何を求めてユースセンターまあぶるに来ていると感じるか。

森年氏：

子どもたちが口を揃えているのは、「地域の人と交流したい」ということ。イベントをしても、誰が来てほしいようなイベントを考えるのが根本にあって、小さい子からシニアの方まで来てほしいと考えている。

副本部長（伊藤副市長）：

そういう子どもは意識の高い子のように思うがどうか。

森年氏：

3人の常勤スタッフがいろんな人を紹介する。真庭市には個性的な方がたくさんいるので、紹介をすともっと話を聞きたい、もっとここにいたいというところにつながっている。

副本部長（伊藤副市長）：

真庭市の「はぐみプロジェクト」の施策に対して、何かご要望、役割を担って欲しいことがあるか。

森年氏：

私たちだけでは拾いきれない子どもたちを受けられるところが必要。人材確保や、資金面は課題にはなってくるが、それを行政に頼っていても、市民活動としては成り立たないと思っている。伴走支援やアドバイス、自走ができるような形を一緒に考える点をサポートしていただきたい。

本部長（太田市長）：

応援団みたいなことをしてくれる人たちが増えると良い。

副本部長（伊藤副市長）：

子どもたちは家庭でない違う場所で自分を少し休む時間がほしいのだろうか。

森年氏：

中には「友達がいない」という子どももいる。話を聞いてもらえたり、無条件に受け入れてもらえたり、その背景をあまり気にせず、利害関係がないような大人を求めているようなところはある。

副本部長（伊藤副市長）：

友達がいない子がここを利用してくれることが、まさに居場所の役割を担っていると思う。役割分担でいうと情報発信の部分。こちらも課題だが、その中で一緒にユースセンターまあぶるの取り組みも、市の情報の中で市民や企業に対して発信していくような取り組みを

	<p>やっていたらと思う。</p> <p>本部長（太田市長）： ユースセンターまあぶるの存在を知らない人がまだ多い。このあたりも発信できるようなことがあれば良い。</p> <p>教育長： やってみたいが集まる場所、やっていいし、やらなくてもいいっていう心理。安全性が担保されるっていうこと。自分で決めることができること。我々が本当に考えないといけないことを民間レベル NPO でしてくれている。行政はいかに応援する伴走するのかを考えていくことが大事。</p> <p>副本部長（伊藤副市長）： 本部会議のメンバーそれぞれが仕事で、視点を変えることでユースセンターまあぶるの取り組みと連携、支援の可能性もあるかもしれないので考えてほしい。</p> <p>教育長： それぞれ、思いがあって活動されているから、そこの意見をよく擦り合わせてほしい。</p> <p>本部長（太田市長）： 職員にはユースセンターまあぶるを知ってほしい。また、ユースセンターまあぶるの活動を市民、あるいは市外の人にも知ってほしい。そういう認識を持って仕事をするのはすごい大事なこと。</p> <p>生活環境部（代理）： ユースセンターまあぶるに通う子どもの中には学校には行きにくい、ユースセンターまあぶるは楽しみにしている子どもはいるのか。</p> <p>森年氏： 学校に行き渋りをしている子どもたちも数名来ている。放課後の時間帯に学校帰りの子どもたちと顔を合わせるのが大丈夫な子どもたちなので、本当にその人に会うのが怖いとか、もう外に出れないっていうような子ども達にはリーチはできていない。学校には行っていないけれども、放課後、友達と一緒に来るっていう子たちも数名いる。</p> <p>本部長（太田市長）： 多様な場がある真庭を作っていきたい。</p>
閉会	<p>副本部長（伊藤副市長） 「こどもはぐみ応援プロジェクト」の目的の一つには保護者、当事者である市民への情報発信が非常に重要と思う。今年度も情報発信に力を入れていく。また、個々の仕事について、横のつながりを持ち、全体で事業を把握して、その上でこどもはぐみという視点で担当事業をブラッシュアップしていく連携の可能性を探っていくことも本部会議を立ち上げた意味でもある。</p> <p>今日の森年さんのお話も参考にしていきながら市役所全体ではぐみプロジェクトを進めていけるようにしていきたい。</p>
確認事項	<ul style="list-style-type: none"> ・本年のこども・子育て施策について意見を出し合い認識を深めた。 ・各課間での連携にも力を入れ、積極的な情報発信を行っていく。 ・こどもの権利を全体の共通認識にする ・条例を作るだけでなく、こどもの権利を行政としてどのように守っていくかを考える